

高校調査書の研究

— 「学習成績概評A」の意味 —

東北大学アドミッションセンター 倉元 直樹, 東北大学大学院工学研究科 川又 政征

1 はじめに

大学入試の多様化政策の中で、様々な選抜資料を活用することが奨励されている。平成11(1999)年に出された中教審答申では「高等学校での学習成果を多面的に評価する入学者選抜」が推奨され、中でも「調査書等、高等学校の評価」を一層活用することが勧められている(中央教育審議会, 1999)。また、平成12(2000)年に出された大学審答申においても、「高等学校における平素の学習等を評価する観点から、調査書、様々な学習活動、…(中略)…の多様な資料をより一層活用することも必要である」と大学入学者選抜における高校調査書の活用への期待が述べられている。アドミッション・オフィス入試(AO入試)においても、「受験生に一定の基礎学力があることを要求し、調査書を活用するほか、自ら試験を実施し必要な学力を判定することも妨げられるべきではない」とされ、学力判定指標としての高校調査書の利用が提案されている(大学審議会, 2000)。

東北大学では、平成11(1999)年4月にアドミッションセンターが発足し、平成12(2000)年度入試からAO入試が導入された。東北大学のAO入試は従前の推薦入学からの移行であり、選抜における基本的な方針は推薦入学と同一である。また、「研究第一主義」を標榜する大学の性格上、AO入試発足当初から学力重視を全面に掲げている。平成13(2000)年度入試では、理学部、工学部、歯学部が合計6種類のAO入試を行い、経済学部、薬学部、農学部が4種類の推薦入学を行った。そのうち、高校卒業見込み者を主たる対象として選抜を行い、大学入試センター試験を課さずにその判定を行う「AO入試Ⅱ期」と「推薦入学Ⅰ」では、歯学部を除く5つ

の学部での募集が行われた。東北大学の特別選抜(AO入試、推薦入学)では、大学審議会に示された方針に沿って、高校学力評価の1つの指標として調査書を利用している。その例として、AO入試Ⅱ期を実施した2学部の出願要件、推薦入学Ⅰを実施した3学部のうち農学部を除く2学部の推薦要件には「調査書の学習成績概評がA段階」であることが含まれている(東北大学, 2000)。したがって、東北大学の特別選抜を目指す高校生にとって学習成績概評が「A段階」に届くかどうかは、これらの入試のスタートラインに立てるかどうかを決める大切な事項なのである。

その一方で、高校調査書とはそもそもどういったものなのか、中でも「学習成績概評A」とは何を意味するのか、必ずしも判然としないままに大学入学者選抜の実務が進められているのも現実である。確かに、これまでも高校調査書に対して大学関係者が無関心だったわけではなく、調査書を重要な分析対象とする入試研究も少なくない(例えば、平野・渋谷, 1996; 竹生, 2001)が、上記のような素朴な疑問を改めて問い直す必要もあるのではないだろうか。そう考えたのが本研究の出発点である。

2 「調査書」、及び、「学習成績概評」とは何か

学校教育法施行規則第12条の3によれば、「校長は、その学校に在学する児童等の指導要録(学校教育法施行令第31条に規定する児童等の学習及び健康の状況を記録した書類の原本をいう。以下同じ。)を作成しなければならない」とある。また、同第15条②において、そのうち「入学、卒業等の学籍に関する記録については、その保存期間は、20年間とする」と定められている。その他の記録は5年間保存すればよいので、指

導要録，中でも学籍に関する記録は特別に大切なものであることが分かる。

調査書とは、「入学者の選抜のため校長が進学希望校に提出する文書で、学業成績・行動生活記録等を記した書類（解説教育六法編修委員会，2000）のことである。中学から高校への進学時には、通常、内申書と呼ばれている。生徒指導要録を入学者選抜資料としての様式に則って書き改めたものが調査書である、と理解しても大きな誤りではないだろう。

大学入試で選抜資料として利用される高校調

査書の様式は、文部省²⁾が毎年通知する大学入学者選抜実施要項によって定められている。その中で、学習成績概評は「全体の評定平均値」によって定められ、表1のように規定されている。また、全体の評定平均値の算出方法も「高等学校生徒指導要録に基づき、すべての教科・科目の評定の合計数をすべての評定数で除した数値」と定められている³⁾。さらに、調査書には「成績段階別人数」を類型別、または、科別に記入することと決められている（文部省，2000）。

表1 学習成績概評

全体の評定平均値	5.0 ~ 4.3	4.2 ~ 3.5	3.4 ~ 2.7	2.6 ~ 1.9	1.8 以下
学習成績概評	A	B	C	D	E

以上の議論から、「学習成績概評A」とは大学入学者選抜実施要項によって定められた基準であり、「全体の評定平均値4.3以上」を意味することが明らかになった。それでは、個々の評定はどのように決められるのだろうか。実は、ここまでの厳格な規定とは裏腹に「5段階絶対評価」（下村，2000）とあるだけで、法令上の規定は見当たらない。相対評価が個人の集団内位置という集団基準に基づく評価であるのに対し、絶対評価とは教育や学習の目標に基づく評価（鹿毛，2000）なのだが、具体的な内容が茫漠として見えてこないのだ。

高校現場の教師たちは実際に何に基づいて評価を行っているのだろうか、という疑問が残る。正式な調査を行ったわけではないが、各高校に「教務内規」、または、それに類するような名称の校内規則があり、それに基づいて評価を行っているらしいというのが一応の回答である。その規則も学校によってまちまちのようで、「定期テストの平均点80点以上を5」とするところもあれば、「75点以上を5」とするところ、「上位15%が5」と定めているところもある、といった具合である。

南・野尻・越田（2000）は高校調査書を調べ、高校、コース別の成績段階別人数が学校によって大きく違っていることを見出したが、以上の事情を鑑みると無理もないことである。個々の評定の判断が高校の内規に委ねられており、それに対して統一的な基準がない以上、学習成績概評は高校の考え次第でどのようにでもなると言っても過言ではない。極端な話、高得点が続出するような易しい問題を定期試験に出せば評定値は上がるし、逆に、到達度を高く設定して厳格に評価を行う方針の高校で学習成績概評A段階に到達するのは至難の業となる。さらに、高校によって学習内容の難易度にも違いがあることは周知の事実である。したがって、残念ながら学力評価の指標としての調査書の基盤はかなり曖昧で、「学習成績概評A段階」が何を意味するかは、当該学校の内規と教育内容の水準に照らし合わせて見なければ判断のしようがない。

評価に関わるこのような状況は、国際的に見て必ずしも妥当なものとは言えない。例えば、オーストラリア・クィーンズランド州では我が国の高校調査書に当たるような選抜指標を中心とした大学入学者選抜が行われているが、各科

目の成績はシラバスに定められた評価基準によって判断される。さらに、選択科目の難易度、学校間格差の不公平をできるだけ解消するために、QCSテストと呼ばれる総合試験を用いて何重にも尺度化⁴⁾が行われた上で指標化されているのである(山村・平, 1998)。

3 学習成績概評段階別人数の分布

演繹的なアプローチから本研究の課題を解明することが著しく困難であることが分かった。そこで、以後の分析は実際の入試で得られた調査書データをもとに議論を行う。

本研究で分析の対象とするデータは、平成13年度東北大学AO入試Ⅱ期、及び、Ⅲ期の工学部

に志願者を輩出した高校のものである。Ⅱ期(工学部)における選抜資料は提出書類、面接、小論文であり、Ⅲ期(工学部)はそれにセンター試験(5教科6科目)が加わる。

平成13年度においては、Ⅱ期には113校から164名、Ⅲ期には125校から206名(延べ199校、370名)の志願者があった。調査書の記載対象の集団構成員が異なる出身高校、類型(または、科)、年度を全て区別した場合⁵⁾には、延べ228種類のデータが得られた。概評A段階の人数を合計の人数で割って比率を出した結果、表2のように多くは10%~30%をA段階と判定しているが、極端にA段階の比率が多いケースも散見された。

表2 成績段階Aの割合

段階Aの割合(%)	-10%	-20%	-30%	-40%	-50%	-60%	-70%	-80%	-90%	-100%	合計
度数	16	89	74	31	9	6	1	1	0	1	228
比率(%)	7.0	39.0	32.5	13.6	3.9	2.6	0.4	0.4	0.0	0.4	100.0

4 標準スケール(SS)による学習成績概評A段階の定量化

成績段階Aの人数比のばらつきを定量的に評価するにはどうすればよいのであろうか?この問題に対して単純明快な答を与えるのは困難である。本研究では、1つの便法として、東北大学工学部のAO入試に志願者を送る高校の標準的な概評段階別人数比の分布を考える。そして、それに照らし合わせた場合、個々の調査書に記載された学習成績概評Aの下限値4.3がいくつに当たるか、という形で再評価することを考えることとする。

まず、個々の評定平均値の分布がそれぞれの評価の母集団で正規分布を成すと仮定する。調査書に記載された人数が正規分布を5段階に区分して得られたものと考え、段階の境界値に当たるz値が逆算できる。表3はX校が甘い評価、Y校が厳しい評価を示す架空の例である。表4によると、それぞれの母集団に照らし合わせて同じ $z=0.1$ の評定(下から54.0%)の評定平均値を持つ生徒が、X校では段階A(すなわち、A-B境界値より上)の評価を受けるのに対し、Y校では段階C(B-C境界値とC-D境界値との間)の評価を受けることになる。

表3 甘い評価、厳しい評価の例

学習成績概評	A段階	B段階	C段階	D段階	E段階
甘い評価(X校)	50.0%	38.5%	10.1%	1.3%	0.1%
厳しい評価(Y校)	11.5%	30.6%	36.7%	19.8%	1.4%

表4 段階区分の境界値

境界値	4.25(A-B 境界)	3.45(B-C 境界)	2.65(C-D 境界)	1.85(D-E 境界)
X校のz値	0.0	-1.2	-2.2	-3.0
Y校のz値	1.2	0.2	-0.8	-2.2

次に、z 値を評定平均値のスケールに変換する。そのために、まず、東北大学AO入試工学部の標準スケール (SS) 値を作成する。D=1.7と置いたときのロジスティック関数

$$p = 1 / (1 + \exp(-D \cdot z)) \quad (1)$$

が累積標準正規分布関数によく近似することが知られている。そこで、 $p / (1-p)$ の対数を取り、

$$\hat{y} = f(x) = \log(p / (1-p)) = b_0 + b_1 \cdot x \quad (2)$$

として、データから「評定値 x」と「x 以下の評定平均値が得られる比率 p」との関数関係を表すこととする。ここから、比率 p が与えられれば評定値 x に換算することが可能になる。これを「東北大学工学部のAO入試における標準スケール (SS: Standard Scale)」と呼ぶこととする。このとき、

$$z = (b_0 + b_1 \cdot x) / 1.7 \quad (3)$$

である。

5 結果

本研究における分析では、228種類の調査書の成績段階別人数から算出されるB, C, D以下の人数の比率を独立したデータとして扱った⁹⁾。それぞれのxの値は表4に示した境界値である。なお、D以下の評価を受けた人数が0のケースが35、そのうちC以下が0のケースも4あったが、その部分のみを分析から除いた。x = 4.25のデータ数が228、x = 3.45が224、x = 2.65が193、合計645が分析対象データ数である。回帰分析の結果は、 $b_0 = -11.41$ 、 $b_1 = 3.02$ であり、モデルの説明率は $r^2 = .86$ であった。表5のように、単純平均値よりも成績段階Bの比率がやや多く、A, Cの比率がやや少なく推定される結果となった。

表5 平均値とSSによる推定値

学習成績概評	A	B	C	D以下
平均値 (n = 228)	23.1%	44.1%	29.5%	3.3%
推定値	20.2%	51.9%	25.6%	2.2%

実際に調査書で得られる「学習成績概評A」の下限值である4.3をSS値に換算した値の分布は表6に示すとおりである。全体では平均4.27とやや低めであるが、個別の調査書については最も厳しい評価のSS値で4.74、最も甘い評価で3.04が表記上「4.3」となる。

ところで、同一の学校の中での異なるコースや年度の評価の仕方はどの程度一貫性があるのだろうか。同じ学校、コースから異なる年度の卒業生が出願していたケースが18あった⁷⁾。表6に示す通り、SS値にほとんど変化は見られず、

2つの年度の相関係数も $r = .98$ と極めて安定していることが分かった。一方、同じ学校で理数科と普通科から出願者が得られたケースが9あった⁸⁾。理数科の評定の方が甘いのが多数派であったが、普通科の方が甘いケースも2つあった。また、相関係数も $r = .04$ と無相関に近い。以上のことから、限られたデータではあるが、特別の事情がない限り同じ学校の成績の基準が年度によって異なることはないが、理数科と普通科は、調査書の評価の面では実質的に「異なる学校」と考えた方がよいことが分かった。

次に、普通科のみのデータを対象として、卒業年度を区別せずに出願者が「Ⅱ期のみ」、「Ⅲ期のみ」、「双方出願」の3種類に区分して分析を行った。1元配置の分散分析の結果、5%水

準で平均値に有意な違いが見られ ($F [2, 176] = 3.74, p < .05$)、その違いは「Ⅲ期のみ出願」と「双方出願」の間に見られることが分かった。

表6 「評定平均4.3」のSS値の分布

	平均	標準偏差	最高	最低
全体 (n=228)	4.27	0.23	4.74	3.04
旧年度 (n=18)	4.28	0.19	4.66	3.97
新年度 (n=18)	4.27	0.18	4.65	3.97
差 (旧・新)	0.01	0.04	0.08	-0.08
理数科 (n=9)	4.05	0.19	4.30	3.78
普通科 (n=9)	4.19	0.19	4.50	3.81
差 (理数・普通)	-0.15	0.26	0.49	-0.44

表7 出願区分による比較

	平均	標準偏差	最高	最低
Ⅱ期のみ出願 (n=66)	4.29	0.23	4.74	3.40
Ⅲ期のみ出願 (n=76)	4.33*	0.19	4.74	3.81
双方出願 (n=37)	4.22*	0.16	4.55	3.81

*: $p < .05$

6 考察

AO入試、推薦入学等の特別選抜が年々増加していく現状では、選抜資料としての高校調査書の重要性はますます重みを増すことであろう。それにも関わらず、評定の根拠は極めて曖昧である。本研究では、学校、コースによって評定平均値、また、その結果から現れる学習成績概評の解釈がまちまちである様相を定量的に示すこととなった。

元来、指導要録というものは学校内部の記録としての意味や価値が第一義的と言える。内部保存を目的とした記録であれば、その中での一貫性が保たれていれば他の組織と異なった基準を用いていても何の支障もない。しかし、それが明白な基準もなしにそのまま学校外の世界に

出て行き、大学入学者選抜の資料として用いられているのが現状なのである。あたかも異なる通貨単位を用いながら、表面的に現れる金額の数値を同等として扱って取引を行っていることと同じように感じられはしないだろうか。もちろん、本研究では全く触れなかった、学校による教育内容や水準の違いの問題も残っていることは言うまでもない。

それでも、多くの大学入試の当事者は選抜に高校調査書を利用しないわけにはいかない。高校の現場にも様々な事情があるだろうし、評定の基準を即座に統一するのは困難だと考えられる。しかし、評定平均値を選抜に利用する際に、真摯に適正な評価を試みている学校の出身者が不利に扱われないような工夫を心掛けることを大学側が意識する必要があるのではないだろうか。

注釈

- 1) 学部が異なるごとに異なる種類として数えている。推薦入学も同様である。なお、平成15(2003)年度から法学部もAO入試を導入し、合計7種類となる予定である。
- 2) 現在は文部科学省。
- 3) 評定平均値の算出方法は現行の指導要領に則って学習を行った高校生がいわゆる現役として初めて大学受験を行った平成9(1997)年度入試から改訂された。それまでは、「各教科の評定平均値の合計数を履修教科数で除した数値を記入すること」(文部省, 1995)となっていた。
- 4) 我が国の制度で言えば、いわゆる得点調整に近い。
- 5) II期とIII期では出願の時期(10月末と1月末)が違うので、調査書に記載されている「成績段階別人数」が完全に一致するとは限らない。II期とIII期の両方に受験者を輩出した場合には、III期のデータを用いた。
- 6) 成績段階Eは稀にしか見られなかったため、Eの比率は用いなかった。
- 7) 3つの年度から出願されていたケースが1つあった。新しい方から2つの年度をデータとして用いた。
- 8) いずれも平成13年度卒業生(現役生)のデータである。

文献

中央教育審議会 1999 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申) 平成11年12月16日

- 大学審議会 2000 大学入試の改善について(答申) 平成12年11月22日
- 平野光昭・渋谷昌三 1996 高校調査書に記載された成績及び諸活動と医師国家試験の可否の関係, 大学入試研究ジャーナル 第6号, 76-83.
- 鹿毛雅治 2000 相対評価・絶対評価 森敏昭・秋田喜代美編 教育評価重要用語300の基礎知識 明治図書 21.
- 解説教育六法編修委員会編 2000 解説教育六法2000 平成12年度版 三省堂
- 南一郎・野尻洋一・越田豊 2000 学内成績と入試成績および高校調査書, 大学入試研究ジャーナル 第10号, 41-48.
- 文部省 1995 平成8年度大学入学者選抜実施要項 平成7年5月26日文高大第178号文部省 高等教育局長通知
- 文部省 2000 平成13年度大学入学者選抜実施要項 平成12年5月23日文高大第178号文部省 高等教育局長通知
- 下村哲夫 2000 教育法規便覧13年版 学陽書房
- 竹生政資 2001 高等学校成績および入学試験成績の大学成績との関連について, 大学入試研究ジャーナル 第11号, 79-86.
- 東北大学 2000 平成13年度(2001年度)入学者選抜要項 平成12年7月
- 山村滋・平直樹 1998 オーストラリア・クイーンズランド州の高校成績を利用した大学入学者選抜制度, 大学入試研究ジャーナル 第10号, 35-40.